慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The Monk's Taleに関する一考察
Sub Title	On The Monk's tale
Author	小長谷, 弥高(Konagaya, Yataka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.136- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Monk's Tale に関する一考察

小長谷　弥高

The Monk's Tale は *The Canterbury Tales* の中の物語であり，巡礼 Chaucer の語った *The Tale of Melibeus* に続いて Monk が Tabard 亭の Host の求めに応じて話したものである。*Monk's Tale* は8行連で書かれており，連が一つの短かい序詩に続いて，極めて短かい一連だけの"悲劇"から，16連の"悲劇"まで長短さまざまな"悲劇"の exempla が全部で17並べられている構成をとっている。そのなかで Sampson, Hercules, Balthasar, Petro (Kyng of Cipre), Antiochus, Cesar, Cresus の7人の"悲劇"には短いながら moral が明示されている。(1) そして Sampson と Antiochus の moral を除いて残りはすべて Fortune に言及している。特に最後の Cresus の"悲劇"の moral,

Tragedies noon oother maner thyng
Ne kan in syngyng crie ne biwaille
But that Fortune alwey wole assaille
With unwar strook the regnes that been proude;
For whan men trusteth hire, thanne wol she faille,
And covere hire brighte face with a clowde.

(VII, 2761-6)

は Fortune 言及しているが同時に"悲劇"の定義も含んでいる。この Cresus の moral は考えようによっては17の"悲劇"全体の moral とも考えることが可能である。つまりこの moral を Cresus だけのものと考えると，最初 Monk が

... tragedies wol I telle,

of whiche I have an hundred in my celle.

(VII, 1971-2)

と予告した"悲劇"は17番目で終ることなくまだまだ続くことになり，Knight の

Hoo!...good sire, namoore of this!

That ye han seyd is right ynongh, ywis,

And muchel moore...

(VII, 2767-9)

という発言も当を得ていることになるが，若し此の moral をそれまでの17の"悲劇"全体をしめくくる moral だと考えると，*Monk's Tale* はここで終りであり，単調な"悲劇"の羅列に業を煮やした Knight による中断は，*Canterbury Tales* 全体としての物語を進める技術上の工夫であると考えねばならなくなる。(2) 事実 Cresus の話の次にあるこの moral はその内容の敷衍性，位置などのため，Cresus の話の moral というより，*Monk's Tale* 全体の moral と考える方が適当で，そう考えれば *Monk's Tale* はより構成上の統一を持つ事にもなり，この話の解釈上より妥当であると思われる。即ち *Canterbury Tales* の構成から見ると，Knight による中断という技法が用いられているが，その中断は *The Cook's Tale* のように書き進める意向が明らかに認められるのに途中で切れている状態とは異なり，作者は Monk に語らせる物語としては現在の *Monk's Tale* を構成する17の"悲劇"で一つのまとまりを考えていて，*Sir Thopas* の場合と同様に現在の形で聞き手又は読者にこの話の判断を委ねている。従って本稿では *Monk's Tale* が現在ある形でこの話に対する Chaucer の意向を完全に反映していると考え，その前提に立って此の17の"悲劇"の物語としてのまとまりを考え，更にこの物語が John of Gaunt に対して持っていた意味，Knight の中断の持つ意味，語り手 Monk と Monk の語った物語との結びつき，直前にある *The Tale of Melibeus* とこの話の結びつきなどについて検討したい。

Tragedy というものがどれ程詩人達の心を捉える genre であったかは文学史を繙くまでもなく明らかなことであり，Chaucer が古典の tragedy の或るものに特に親しんでいて，自分で幾つかの“悲劇”の詩作を試みていたり，Boccaccio の *De casibus virorum illustrium* を読んで，“悲劇集”を編み始めていたりしていても不思議ではない。だがそのような“悲劇”が Chaucer の多くの complaints の場合のように独立した形で世に出されることがなかったのは何故であろう。個々の“悲劇”が，或は“悲劇集”が物語として独立性の上で難点があったかも知れない。その上 Chaucer は一度書きあげたものを手許に暖ためておくことが多かった。そして *Melibeus* の場合のように後になって適当な機会にそれをそっくりそのまま利用したり，*Ceys and Alcione* を *The Book of the Duchess* に組込み，*Palamon and Alcite* を *Knight's Tale* として改作したように，手許にあるものに若干手を入れて転用したこともあった。従って Chaucer の手許にあった幾つかの“悲劇”についても機会があるまでしまいこまれていたと考えられよう。そして Modern Instances と呼ばれる Pedro of Spain, Pedro of Cyprus, Barnabo, Ugolino の4人に関する4つの“悲劇”は別として，他のものは *Canterbury Tales* の構想が湧いた時には既に相当まとまった形になっていたと考えられる。(3)

然し Chaucer に“悲劇”を発表するのを控えさせていた大きな理由の一つは恐らく悲劇というものの持つ広い含みに由来するものであったと思われる。同じ一つの“悲劇”を聞いても，聞く人によって，特にその因果応報に神の摂理を理解するもの，人間の傲慢さとか弱さに感ずる者，人生のはかなさを見るもの，運命の欺瞞，或は気紛れで苛酷な性格を見てとる者，自分又は特定の個人にその類似性を考える者，驕り高ぶる者の没落を期待する者，その他いろいろに受けとり，さまざまな解釈の仕方をする者があったであろう。*Monk's Tale* は実際に Chaucer が生活していた局面で考えみると，その聴衆の多くは此等の“悲劇”を容易に Gaunt と結びつけることになったと思われる。何故ならば Chaucer にとっての“悲劇”は次のように定義されている。

Tragedie is to seyn a certeyn storie,
As olde bookes maken us memorie,
Of hym that stood in greet prosperitee,
And is yfallen out of heigh degree
Into myserie, and endeth wrecchedly.

(VII, 1973-7)

いいかえると "greet prosperitee" を謳歌し，"heigh degree" を占めている人物しか "悲劇" の対象となり得なかった。そしてそのような人物は極めて少数であり，限られた特定の人だけであった。前述の Cresus の "悲劇" に続く moral の中では Monk は更に限定して "悲劇" の対象を "regnes that been proude" に限っている。*Monk's Tale* の中の "悲劇" の主人公は偶然にせよ故意にせよ英国人以外の例のみ集められているけれども，読者が自分の国の王権又はそれに相当する権力の座を占めている者との類似を考える可能性は充分にあったであろう。そしてその場合読者の念頭に去来する人物は国王 Richard II ではなく国王以上に "heigh degree" と "prosperitee" を恣まにしていた悪評高い Gaunt の "regnes that been proude" に他ならなかったであろう。

当時の Gaunt は新たに勃興して来たブルジョワジーを背景とした下院の勢力増大に断えず反対しており，黒死病流行後の労働力不足に由来する一連の百姓一揆やロンドンの暴動では農民や反徒の敵意が Gaunt に集中していた。更に彼はまだ幼少であった Richard 王の王権を勝手に自分の掌中に収めていると非難されていたし，フランス遠征の失敗やスペインに対する野心のために王室の財政に大きな負担をかけて怨みをかっていた。つまり国王を凌ぐ高い権力を持ちながらあげて朝野の顰蹙をかっていた。(4) そして *Milibeus* の中で説かれている理想的な君主 "a lord to be biloved of hise citizeins and of his people" (5) とは全くかけはなれた存在であった。そのため "悲劇" が自由な解釈を許されるような独立した形で発表されたならば，高い地位にある者の没落の物語は Gaunt の没落に対する人々の期待と相重なり，完全に Gaunt と結びつけられて読まれ得る下地が出来て

いたといえる。 Chaucer は彼にとっては保護者であり，友人でもある Gaunt を傷つけるような形の没落を主題とするこのような“悲劇集”を不用意に持出すことが出来なかったと考えられる。

Monk's Tale の“悲劇”が中心として取りあげている点が“悲劇”そのもの，或はその因果関係ではなく，むしろ運命の女神の気紛れであったことは *Monk's Tale* の書き出しの proem,

I wol biwaille, *in manere of tragedie,*
The harm of hem that stood in heigh degree,
And fillen so that ther nas no remedie,
To brynge hem out of hir adversitee.
For certein, *whan that Fortune list to flee,*
Ther may no man the cours of hire withholde.
Lat no man truste on *Blynd prosperitee*;
Be war by thise ensamples trewe and olde.[6]

(VII, 1991-8)

にも明らかであり，それに続く個々の“悲劇”も explicit に或は implicit にその線に沿って記述されている。運命の“false wheel”に心を留めさせたのは彼の文学的素養を培うのに大きな役割を果した *Roman de la Rose* や Boethius の *De Consolatione Philosophiae* の影響であったかも知れない。それに Chaucer には *Fortune* という短い詩が残っていることからも想像されるように，人間の生命が社会生活の中で断えず危険に曝されていた中世[7]に於ては運命の気紛れが Chaucer ばかりでなく一般の人々の深い関心事であったであろう。同じ“悲劇”を扱った Lydgate の *The Fall of Princes* の場合には大部分の“悲劇”に Lenvoye がついて，それが運命の気紛れに着せられることもないではないが，主として因果関係の面からとりあげられ，高慢を戒めたり，不信仰を諭したりする作者としての moral が明記されている。それに対して *Monks Tale* の場合は“悲劇”という名称こそかせられているが，それはあくまでも物語の選択を規制しているだけで，個々の exemplum には Lydgate のような教訓的色彩は多

くの場合副次的意味しか認められず，終始運命の女神の気紛れが主題であると考えられる。このことは当時の人々の共感に訴えたばかりでなく，"悲劇" と Gaunt との結びつきを弱める結果にもなったであろう。

前述の如く *Monk's Tale* は "verray parfit gentil" とされている Knight によって可成り無遠慮に話の腰を折られているが，Knight が *Monk's Tale* を止めた背景は何であったであろうか。Canterbury への巡礼達の中では Knight と Monk は肩を並べる程社会的地位が高く，[8] Knight に最初に話をさせるのにくじ引きで決めた Host も，Miller という横槍が入って実現しなかったが一度は Knight の次の話り手として

Now telleth ye, sir Monk, if that ye konne,
Somwhat to quite the Knyghtes tale.

(I, 3118-9)

と Monk を指名している程である。Host が

Youre [Monk's] tale anoyeth al this compaignye.

(VII, 2789)

というのが事実で，Monk の話に巡礼達が厭き厭きしていたとしても，Knight 以外の巡礼が Monk の話に口をはさむことは儀礼上穏当でないと感じられたのであろう。その上 Knight が話をした Emelye をめぐる Palamon と Arcite の恋の鞘当ての物語 *Knight's Tale* はその眼目がその二人の男の葛藤ではあったが，結果からみると一種の "喜劇" であると云える。つまり二人の間で争われた決闘で Arcite は破れ，どん底の "povre estate" におちていたが，Theseus の計らいで間もなく Emelye と結婚することになり愛の高い地位に置かれることになった。そのため Arcite については低い地位から高い地位に運命の車輪が廻っており，Dante が地獄から天国えの登りを *Divina Commedia* と名付けたのと同じ中世的意味で *Knight's Tale* は "喜劇" である。Knight は *Monk's Tale* を批評して，

... it is a greet disese,
Whereas men han been in greet welthe and ese,

To heeren of hire sodeyn fal, allas!
And the contrarie is joye and greet solas,
As whan a man hath been in povre estaat,
And clymbeth up and wexeth fortunat,
And there abideth in prosperitee.
Swich thyng is gladsom, as it thynketh me,
And of swich thyng were goodly for to telle.

(VII, 2771-9)

と述べているが，これは Knight が自分のした話の性格を裏附けると共に，Monk の話には"悲劇"的な結末しかないので興味を見出せず，何時はてるともなく続く"悲劇"の羅列に対して彼の立場から出た痛烈な批判ともなっている。Chaucer 自身も *Troilus and Criseyde* の中で *Troilus* に関して

Go, litel bok, litel myn tragedie,
There God thi makere yet, er that he dye,
So send myght to make in som comedye!

(V, 1786-8)

と書いているし，Host にも Knight の中断のあとを引継いで

... of a tragedie
Right now ye herde, and, pardee, no remedie
It is for to biwaille ne compleyne
That that is doon, and als it is a peyne,
As ye 〔Knight〕 han seyd, to heere of hevynesse.
・・・
Swich talkyng is nat worth a boterflye,
For therinne is ther no desport ne game.

(VII, 2783-91)

と云わせているので Chancer は *Monk's Tale* については Knight の側に立つと考えられる。そのような意味で *Monk's Tale* の次に"喜劇"で

ある *Nun's Priest's Tale* が来ているのは対称的な構成として注目すべき点であろう。

最初は Knight ではなく Host に依って *Monk's Tale* を中断するという単純な形が Chaucer によって試みられ，それが後になって Knight による中断を Host が賛同するというやや複雑な形に変更されていることが写本の研究によって可成り明確にされている。(9) *Monk's Tale* の中断のきっかけを作り，同時にその話の批評をする者としては，単に司会者的な立場にある Host よりも Knight の方が社会的な地位や彼の話した物語に見られる性格から見て，はるかに相応しい人物であり，*Canterbury Tale* 全体の構成についての作者の考慮をより良く反映していると思われる。

この物語を話者の Monk との結びつきの点で考えて見ると，このような"悲劇"が或る程度まで Gaunt に結びつけられることもやむを得ないとすれば，俗人でない Monk は差障りが最も少なかったであろう。その上教会関係者である Monk は gaunt の広く知れわたった女性関係の乱れや，John Wyclif の弁護などの事で Gaunt を批判し，警告をする立場にもあった。ただこの Monk は聖職にありながら狩の大好きな僧侶であり自分でも Edward the Confessor の話をするような口振りであった。(10) Edward 王は Monasticism に大いに好意をよせ，そのため尽力もしていたので聖職にある者にとっては忘れられない国王であったが，同時に狩に凝っていてその方の逸話に富んでいた。Host は *Monk's Tale* の後で口直しに狩の話でもと暗に最初言及した Edward の話を所望するが，(11) 結局 monk は冗談話をする気になれず，その申出をそっけなく断わってしまう。修道院には説教の材料も多く集めてあり，"keper of celle" であるこの Monk がその豊富な資料に基いて"百"の"悲劇"を挙げることも可能であったであろう。ただ此の Host は ars praedicandi の面では決して勝れておらず，Host から話し方の悪さを，

Whereas a man may have noon audience,
Noght helpeth it to tellen his sentence.

(VII, 2801-2)

とあからさまに侮辱される程であった。その他にも明らかに Host にあげ足をとられて暗に皮肉られている。Monk が自分の話の結論として最後に述べた

... whan men trusteth hire 〔Fortune〕, thanne wol she faille,
And covere hire brighte face with a clowde.

(VII, 2765-6, 既掲)

という言葉尻をとらえて Host は

He 〔Monk〕 spak how Fortune covered with a clowde,
I noot nevere what;..

(VII, 2782-3)

と "clowde" の隠喩が分らないように装って意識的に Monk を貶している。勿論 Monk は Cresus の話の中の Phebus との連想が雲が太陽を覆うのになぞらえて Fortune が輝く顔を顔を雲で覆いかくすと述べたのであろう。この喩えは次にあげた Lydgate の場合には "semblabli" という言葉を介在させて分り易い直喩で説明されている。

... ofte it falleth, that a glad morwenyng,
Whan Phebus sheweth his bemys cleer & briht,
The day sumtyme, therupon folwyng,
With sum dirk skie is clippsid of his liht;
And semblabli, thoruh Fortunys myht,
This said prince, bi hir fals variaunce
Fond in hir wheel ful nojous fell greuaunce.

(*Fall of Princes*, Bk., IX, 1695-71)[12]

Lydgate が7行をさいて直喩で表現しているところを Monk は2行の隠喩で述べている。そしてその隠喩を理解出来ない Host があげあしをとるばかりか，更に聞き手のない説教は言うだけ無駄であると公然と侮辱するに及んで，Monk の意欲は萎えるのも自然の理であったであろう。心の中の激しい怒りを圧えることが出来たのは Monk だからこそであったのか

も知れない。或は *Melibeus* の中の

> ... whan this wise man saugh that hym wanted andience, al shamefast he sette hym doun agayn. For Salomon seith: "Ther as thou ne mayst have noon audience, enforce thee nat to speke."

(VII, 1046-7)

というくだりを Monk は記憶していたのかも知れない。それに "th' end is every tales strengthe"[13] と考えていた Chaucer が Monk の話の終ったところで一考を案じ，この話の批評をするのに意識的に Host を思慮の浅い人物に仕立てて Monk の Host に対する風当りを和らげ，更には Gaunt と *Monk's Tale* との結びつきを弱めるように図ったのかも知れない。写本によっては Cresus の "悲劇" が最後になっておらず，Modern Instances と云われる4つの "悲劇" で *Monk's Tale* が終っているものがあるが，その "悲劇" の配列は Cresus の話の終りにある moral から云って，また Host のあげ足とりから見て，*Prologue to The Nun's Priest's Tale* に Knight よる中断という複雑な形がとられた時点では，Claucer の考え方に反することになると思う。[14]

Monk's Tale という "悲劇" の exempla を用いて Monk が云わんとしたことは何であったであろうか。*Monk's Tale* は *Canterbury Tale* の中でも特に各々の物語とその語り手とが密接に結びつき，更に物語同士が密接な前後関係で深く結びついている B_2 という一連の物語群の中に組入れられているので，前の *Melibeus* との関係を特に重要視しておく必要がある。Melibeus の妻 Prudence は，「人間は気紛れな運命の支配を受けているので，運命を信じてはならない。運命の女神 Fortune を背後から更に支配しているあらゆるものの根源である神を信ずることが必要である。そしてその神が決して終りのない幸福え導いて下さる」としている。[15] Melibeus の話に見られるこの考え方を Monk's Tale の "悲劇" と比較した場合職業柄 Monk が説くべき，運命を信ぜずにその背後にいる神を信

じるようにという肝心な部分は言外に述べられていることになる。Knight や Host による批評から察せられるように Canterbury への巡礼達が Monk の話の真意を汲めない程に巡礼としての真に宗教的な心構えを欠いている事を Monk は彼なりに感じていたかも知れない。或はその肝心な部分を敢て述べなかった事で Chaucer は狩に浮身をやっしている Monk を皮肉っているのであろうか。

Monk's Tale には Ugolino のように pathetic な話もあるが，全体として dull な話であることは何人も否定出来ない事実である。然し以上のように考えて来るとこのような dull な形であることがある面では必要だったとも云えよう。そして単独の"悲劇"集としてではなく *Canterbury Tale* の中にあってはじめて新しい意味と存在理由を持ったのではなかろうか。Chaucer が物語集を試み始めたのは作品に見られる範囲では *Troilus* の

... gladlier I wol write, yif yow leste,
Penelopees trouthe and good Alceste.
(V, 1777-8)

に灰めかされている *Legend of Good Women* であり，それが *Canterbury Tales* えとより大規模にまた複雑な構成に発展しているが，規模とか構成力などの点から見て，また詩の技巧や主題の扱い方の面から考えて *Legend* の前に *Monk's Tale* の原型にあたるものがあったのではないかと思われる。つまり ur-Monk's Tale を書いたのが物語集としては最初の試みであったと思われる。そして ur-Monk's Tale に Modern Instances を加えるといった僅かな手直しを加えただけで，そしてその構成上の欠点を承知の上で[(16)] *Canterbury Tales* の中にとり入れることになったのは，晩年の Chaucer の著しい構成力の進歩を示すものとして興味深い。

Monks Tale は Gaunt に微妙に関連する含みがあって主題の選択や取扱い方から言葉の使い方に致るまで扱いにくい"悲劇"であったが，うっ

てつけの Monk という語り手に話させ，Knight に打切らせ，更に Host に批評させる形をとることで余り上出来でなかったこの "悲劇" 集を *Canterbury Tales* の中に持ち込むことが出来た。そして *Melibeus* と *Nun's Priest's Tale* の間に置くことにより単なる "悲劇" 以上の意味づけと解釈の方向づけを可能にすることになった。

註

1 各々 *The Canterbury Tales*, VII, 2091-4, 2136-42, 2244-6, 2397-8, 2627-30, 2724-6. Sampson の moral は次に引用した。本稿の引用は Robinson, F. N., *The Works of Geoffrey Chaucer*, Houghton Mifflin, Boston, 2 nd ed. 1957,

2 Manly, J. M. and E. Rickert, *The Text of The Canterbury Tales*, The University of Chicago, 1940. Vol. II, p. 410.

3 Skeat, W. W., *The Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford, 1894, III, pp. 427 ff.; Manly anb Richert, *ibid*, VI, p.508.

4 Williams, G., *A New View of Chaucer*, Duke Umiversity Press, Durham, 1965. pp. 16-9.

5 Robinson, *ibid.*, *Canterbury Tales*, VII, 1340.

6 イタリックは筆者がつけたもの。尚 Boece, *Consolation of Philosophy*, Bk. ii, pr. 2, 70 の glose を参照。この glose は Chaucer 自身が書き加えたものと考えられている。

7 Power, E., *Medival People*. A Peliccn Book, p. p

8 Kaske, R. E., The Knight's Interuption of the Monk's Tale, ELH., 24, 1957, 249-68.

9 Manly and Rickert, *ibid*, IV, pp. 410-3, 特に p. 412.

10 *Monk's Tale*, VII, 1970.

11 *ibid.* VII, 2805.

12 Bergen, H., *Lydgate's Fall of Princes*, Oxford University Press, 1924. 更に同書 Bk. 1, 3109-19 にも Phebus を雲と結びつけて Fortune が言及されている。尚 Chaucer, *Romaunt of the Rose*, 5311 ff. にも此の連想が見られる。

13 *Troilus and Criseyde*, II, 260.

14 Hammond, E. P. *Chaucer: A Bibliographical Manual*, pp. 241-3., *cf.* Manly and Rickert, *ibid.* IV. p. 511.

15 *Melibeus*, VII, 1450, ff., *et alibi.*

16 *cf. monk's Tale.* 1984-90.